

少女の名前は『やみひめ』——流遠るとおやみひめ。

ごく普通の小学六年生。

身長や体格は平均的だが、顔立ちは非常に整っており愛らしい。長い黒髪をポニーテールにしており、少女が活動的な性格である事がうかがえる。琥珀アンバーのような橙だいだい色の瞳は少し吊り目がちだが、彼女の快活な表情のためか、攻撃的な印象はまるでない。

やみひめという少女は、言ってしまうえばそれだけの存在だ。

真つ当な両親の庇護の下、真つ当に育ち、真つ当に生きてきた。

平穏で平凡な日々、ほんの少しだけ不満を感じる——その程度には幸せに暮らしている、どこにでもいる少女だ。

少年の名前は『アサト』——橘たちばなアサト。

来年の春には卒業を控えた高校三年生。

やや痩せ型だが、それでも一般的な少年の体格からは外れていない。男性にしては伸ばし気味の黒髪と、覇気のない表情が特徴的だが、それも特筆するには値しない。彼もまた、どこにでもいる少年だ。

本来であれば関わるはずのなかった二人。

互いに認識する事なく。道ですれ違っても意識しない。

まったくの他人同士で終わる。何も始まりすらしないはずだった関係。

しかし、ある暑い夏の日——少女と少年は出逢であった。

きっかけは些細な事件。

全国的に見れば取るに足らないローカルニュース。

だが、少女にとっては大切で、とても大きな出来事だった。

第一話

『機獣少女、はじめました』

午後四時を少し過ぎたばかりの公園には、まだ人の姿が多い。広い運動公園だから色々な人がいて、ジャージを着て本格的なランニングをしている大人もいれば、あちこちに設置してあるベンチでお話している中高生くらいのお姉さん達もいる。一番多いのは私より年下くらいの小学生で、サッカーをしている男の子や、バドミントンをしている女の子もいる。

私はと言えば、運動が目的で来た訳じゃない。

ここに来たのは、逢^あいたい人がいるから。

「でも、その前に——」

私が向かったのは、公園の入口近くにある公衆トイレ。ちゃんと管理が行き届いているから、いつも綺麗にしてあるのが嬉しい。

女性用の入口に入ると、四つの洗面台と一枚に繋がった大きな鏡がある。鏡に映っている女の子は当然——私だ。

ポニーテールにした長い黒髪は密かな自慢。橙^{だいだい}色の瞳は少し吊り目がちだけど、きつくはない……よね。自分で言うのもなんだけど、顔は可愛い方だと思う。お父さんは「世界一、可愛いよ」って言うってくれるし、お母さんは美人だから、将来性も充分に期待出来るはず。

髪は乱れていないか、服装におかしな所がないか、自分の姿を入念にチェックする。そこで、胸元の『6年3組 流遠^{るしお}やみひめ』と書かれた名札に目が行った。

「もう放課後だし、外してもいいよね」

昨日、お兄ちゃんに「子供っぽい」って言われて馬鹿にされたのを思い出す。

自分の名前が書かれた名札を外して、代わりに赤いリボンを鞆から取り出して髪を結び直す。

もう一度、鏡を見つめる。赤いリボンが黒いポニーテールに良く映えていると思う。学校だと派手だから付けられないけど、これが私の普段出来る精一杯のオシャレだから。

「……よし、完璧」

念入りに鏡に映った自分をチェックする。ここからは戦闘だから、装備は完璧じゃないと負けてしまう。念のためにと、前髪をもう一度だけ整えてから公衆トイレを出た。

向かうのは、いつもの場所。飲み物の自動販売機から一番離れている場所のせいで、あまり利用者が多くないベンチ。

そんな場所に好き^{この}好んで座って、何をしてもなく、ぼーっとしている男の子がいる。この人が『お兄ちゃん』——私の逢^あいたい人。

けど、お兄ちゃんと呼ぶと、すごく嫌そうな顔をする。初めて呼んだ時の不機嫌そうな

顔は今でも忘れない。ちょっと、ショックだったから……。

だから――

「――アサト！」

お兄ちゃんを呼ぶ時は名前で呼ぶ。『さん』とか『君』を付けても嫌そうな顔をするから、敬称は付けない。普通は年下から呼び捨てにされる方が嫌な気がするけど、男の子はよく判らない。アサトが特別なのかな？

私の声に気付いて、アサトがこちらを向いた。私は駆け寄った勢いのまま、アサトの胸にダイブしようとして――がっしと顔を正面から驚^{わしつか}掴みにされて止められた。プロレス技で言うところのアイアंकローだ。そのまま、ぎりぎりとかめかみを押さえる指に力が込められていく。

「アサト……痛い痛い！」

たまらず悲鳴を上げると、アサトはあっさりと手を離してくれた。

「もう、顔が変になったらどうするの！」

こめかみをさすりながら文句を言う。もちろん、手加減してくれてるから、そんな事にならないと判ってるけど。

「そうだったら……せ、責任取ってよね？」

さりげなくアピールに利用する。男の子はこういうのに弱いて、友達のくらくらが言うてたし。

ちらとアサトに視線を向けて反応をしてみる。今のは効果があったはず。

「……………」

なんだか、すごく可愛そうな目で見られてる。あれ？ 何が駄目だったんだろう？

「それ以上、変になる事はないから安心しろ――やみ子」

ようやく口を開けば、そんな意地悪な事ばかり言う。アサトは、そういう奴だ。

たちばな
橘 アサト。

髪を染めたりはしてないけど、少し長いから学校の容疑検査に引っ掛かりそう。声と同じで、面倒くさそうな雰囲気だけど、それ以外は本当に普通。私より六つ年上の高校三年生で、私の事を『やみ子』と呼ぶ。

「やみ子じゃないって言ってるのに……ちゃんと、やみひめって呼んでよ」

「何が『姫』だ。お前なんか、やみ子で充分だ」

「そんな事言^{こと}って、本当は照れくさいんでしょ？ アサトって女の子に慣れてなさそうだし」

「馬鹿言^{こと}うな。百戦錬磨だ」

「え……本当に?」

アサトに限って、そんな事あるはずないと思うけど、少しだけ不安になる。

「嘘、だよな……?」

「……………う、嘘じゃねえよ」

アサトが一瞬、目をそらした。絶対に嘘だ。

アサトは割りと判りやすい。

そもそも、アサトが女の子と楽しげに話してる姿を想像出来ない。もちろん、私は高校でのアサトの姿は知らないけど。

「じゃあ、もう一回。私がアサトの名前を呼んで、飛び込むところから、やり直しね。ちゃんと抱きとめて、『待ってたよ、俺のマイ・スイート』って言うんだよ?」

「馬鹿か。それに、『俺の』と『マイ』で意味が重複してんぞ」

アサトが、また呆れ顔で私を見てる。

恥ずかしい……。

「しょ、しょうがないでしょ! まだ英語の授業、ないんだもん!」

私の小学校では英語の授業はない。英会話を習ってる訳でもないのに、テレビで聞く程度の英語知識しかない。

「そうやって意味も知らない言葉を使って背伸びしたがるからガキなんだよ。しょせんはやみ子だな。姫なんてのは百年早いんだよ」

「むく! 百年経ったら、おばあちゃんになってるよ!」

「いや……多分、死んでるだろ」

確かにそうかもしれない。今の日本人の平均寿命じゃ、あと百年生きるのは難しい。

「じゃあ私、一生、アサトにやみひめって呼んでももらえないの……?」

それは、すごく嫌だ。

名前で呼んでほしいのに。

好きな人に、ちゃんとした名前で呼んでほしいのに。

なんだか、ひどく悲しい気持ちになってくる。

そしたら――

「……………え?」

ぼん――と、優しく頭に手を乗せられた。俯うつむいていた視線を前に向けたら、アサトが困った顔をしているのが見えた。からかい過ぎてクラスの女の子を泣かせてしまっ、どうしていいか判らない時の男子の顔だ。アサトは高校生だから、慰めようとするくらい余裕はあるみたいだけど、その方法が判らないんだと思う。

それが、なんだか可愛く思えた。だから私は、アサトに助け船を出してあげた。

「撫でて」

「……あ？」

「手を乗せるだけじゃ駄目だよ。優しく撫でて」

「……………」

仕方なくといった顔で、アサトが言われたとおりに私の頭を撫でる。

これ、気持ち良いかも……。

「うみやあ〜」

ついつい目を細めて、そんな声が出てしまった。

「猫か、お前は……」

「喉、こごろころしてもいいよ？」

猫みたいに——と言うと、アサトは「やんねえよ」と目をそらした。やっぱり、照れ隠しだと思っ。

女の子に慣れてないというのは凶星だったのかもしれない。だったら、悪い事言っちゃったかな。

でも、私をやみ子呼びするアサトが悪いんだし。

男女のケンカの九十九パーセントは男に原因があるってテレビで言ってたし。

うん、私は悪くない。

今日は頭を撫でてくれたし、これくらいで許してあげてもいいかもしれない。

でも、もうちょっとだけ、この幸せを感じてもいいよね。

夢は覚めるまでが夢だから。

「そろそろ、いいか？ 手が疲れてきた」

「だーめ。アサトの心ない言葉で傷付いた私の心は、もっと優しく撫で続けないと治らないんだから。乙女心は繊細なんだよ？」

「……さようで」

観念したようなアサトの口調に、ほんの少しだけ、満更でもなさそうなものを感じた。面倒くさそうな顔をするけど、こうして、いつも私に付き合ってくれる。意地悪な事も言うけど、私が悲しい顔を見ると、優しくなぐさめてくれる。最近はずいぶん演技を見破られる事もあるけど。

本質的には、すごく優しい人。

困ってる人がいても、すぐには助けない。だけど、しばらくして誰も助けそうになかったら、仕方なく声をかける。

あの時も、きっとそうだったんだと思う。

夏休みが半分終わった頃、私はこの公園で痴漢に襲われた。まだ外灯が点く前の時間帯だったから、変質者なんて出ないと思ってたし、自分が襲われるなんて考えてもみなかった。訳が判らなくなった。

サングラスで人相を隠してたし、怖くて仕方なかったから、相手の事はよく覚えてない。物陰に連れ込まれて、服を脱がされそうになった。抵抗したら頬を殴られて、痛みと恐怖で、訳が判らなくなった。

抵抗出来なくなった私に、痴漢はいやらしい笑みを向けてきた。

もう駄目だと思った。

その時——痴漢がうめき声を上げて、その場に倒れた。

代わりに高校生くらいの年齢で、少し髪が長い男の子が立っていた。息を切らして、興奮気味に肩を上下させていた。全力で走ってきたんだと思ったけど、今なら、自分の行動に気持ちがいってなかったんだと判る——だって普段のアサトなら、そんな危険な事はしないから。

そう。その男の子がアサトだった。

特撮ドラマのヒーローみたいだった。お姫様を助けに現れた王子様みたいだった。

けど、格好良かったのは最初だけだった。すぐに立ち上がった痴漢に返り討ちにされた。

最初の不意打ちは運が良かっただけで、アサトは痴漢に馬乗りにされて、一方的に殴られた。身体を鍛えている訳でもなければ、喧嘩なんてした事もないんだから当然だ。

だけど、それでも一矢報いたかったんだと思う。黙って殴られ続けてれば、すぐに標的は私に戻ったかもしれないのに、アサトは腹筋の要領で全力の頭突きを痴漢にくらわせた。

痴漢が再びうめき声を上げた時に、アサトと目が合った。

絶対に助けてやる——そう言われた気がした。

顔中ぼこぼこで、鼻血も出てて、痛みで意識も朦朧もうろうとしてるはずなのに。

逆上した痴漢は殴るのをやめ、足でアサトを蹴り続けた。アサトは身体を丸めて、それに耐え続けた。

やめてと叫びたかった。だけど声が出せなかった。

痴漢に飛びついて止めたかった。だけど動けなかった。

何も出来ず、ただただ見てるしかなかった。

私に出来るのは、早くこの悪夢が終わるのを願う事だけだった。

そして、私の願いはすぐに叶った。こんな人通りのない物陰に、大人の人達が現れて、

一瞬で痴漢を取り押さえた。お巡りさんだった。

後から聞いた事だけど、アサトは前もって通報をした上で、時間稼ぎのために飛び出してきてくれたらしい。

アサトは警察病院に運ばれて、私は家までパトカーで送ってもらい、次の日に、お母さんと一緒に事情聴取を受けた。そこでアサトの容態を聞き、午後から警察病院に行った。

病室のベッドで上半身を起こしたアサトは顔にガーゼを貼っていたけど、思ったほど重傷じゃなかった。痴漢も格闘技経験者とかじゃなかったらしく、アサトが防御に徹していたため、ひどい怪我^{けが}にはならずに済んだそうだ。

アサトは私の顔をじつと見て『よかったな、無事で』と、ぶっきらぼうに言っただけだった。その時は私も『はい。ありがとうございます』とお礼を言っただけで、それ以上の会話はなかった。

しばらくは外に出るのが怖くて、ずっと家で過ごした。だけど、夏休みが終われば二期が始まる。学校には行きたかったから、少しずつ外に出る訓練をした。

最初はお母さんと近所の散歩をした。思ったほど恐怖はなかった。私は自分で思ってるより図太いかもしれないと思った。

けど、公園の近くに来た所で足がすくんだ。やっぱり、あの時の事を思い出すから。

あの時、もしアサトが来てくれなかったら、どうなっていただろう。それを考えると身体が震えた。

同時に、アサトが今、何をしてるか気になった。高校生だと聞いていたから、多分、夏休みだと思うけど、私はそれ以上は知らなかった。

そんな時だ。公園に入っていく男の子の姿が見えた。

高校生くらいの背格好で、髪は少し長めで、面倒くさそうな表情。

私は駆け出していた。

お母さんに呼び止められた気がしたけど、聞こえなかった。

公園に入ると、さっきの男の子が何事かと振り向いた——アサトだった。

何も考えられなかった。気付けばアサトの腰にすがりついていた。

病院で別れてから——ううん、公園で助けられてから、ずっとアサトの事が気になっていた。どうして、助けてくれたのか。どうして、病室で私の顔をじつと見たのか。その理由を知りたかった。

けど、そんなのは全部、口実で。

本当は、ただ、逢いたかっただけ。

上手く言葉にして説明は出来ない。私にも判らないから。

だから、溢れだす感情を処理出来なくて、私はただ、アサトの服を涙で濡らす事しか出来なかった。

顔は見られなかったけど、アサトはきつと困った顔をしていたと思う。だけど、逡巡する気配を見せてから、ためらいがちに私を抱きしめてくれた。

すごく安心出来た。

昔、誰かに同じようにされた気がする。

それはきつと、お母さんやお父さんなんだろうけど、不思議と違う気がする。

それ以来、私はリハビリという名目で、アサトと公園での逢瀬をする関係になった。

夏休みの間はお母さんが公園まで付き添ってくれたけど、今では一人でも大丈夫になった。

そして、夏の暑さは終わりを迎え、過ごしやすい気候になった今でも、アサトとの逢瀬は続いている。

「んふふ」

「なんだよ、気持ち悪い」

私の思い出し笑いに、アサトが怪訝な顔をする。仕方ないけど、気持ち悪いはひどいと思う。

「初めてアサトに逢った時の事を思い出してた。ありがとう……助けてくれて」

「………ひどい目に遭ったよ。なのに、助けたのが、こんなちんちくりんとはな」

「え〜。私が可愛かったから助けてくれたんでしょう？」

「ふざけんな。俺は子供に興味ないんだよ」

「子供じゃないもん。もうすぐ中学生だよ？」

「俺に言わせれば中学生も子供だ」

高校生から見たら、そうなのかな？

……そうかもしれない。一つしか違わないのに、五年生は自分より子供に見えるし。

「じゃあ、どうしてアサトは私を助けてくれたの？」

「人として当然だろう？」

アサトの口から、アサトラしからぬ言葉が出た。

「……なんだ、その目は」

「良い台詞のはずなのに、アサトが言うと、なんか胡散臭い」

ちよつと、ひどい気もするけど、正直な気持ちを言ってみる。

「ふん、言ってる」

アサトはそう言ってそっぽを向いた。気にしないように見えるけど、ひよつとしたら、

ほんの少しだけ傷付いてるのかもしれない。だからって訳じゃないけど、私は同じ言葉を重ねた。

「でも、感謝してるのは本当だよ？ だから——やっぱり、ありがとう」

そう言っと、アサトは私に視線を戻して、病室で再会した時のような目をした。

あの日以来、アサトは時々、この目をする。

なんでだろうと不思議に思い、私も無言で見つめ返す。

お互いに黙ってしまい、奇妙な沈黙が流れる。

あれ、これってキスする流れ……？

今なら、雰囲気で名前を呼んでくれるかもしれない。

やみひめ——と。

「ねえ、アサト」

「あ？」

「やみひめって呼んでくれたら、キスしてもいいよ？」

アサトが一瞬、きよんとした。

そして、優しい笑みを浮かべて口を開いた。

これは、もしかして——

「——やみ子」

駄目だった。

直前の笑顔はフェイントで、今は半眼になってしまっている。

「なんで！ 今のは呼ぶ流れだったよね!？」

「絶対、呼ばね——」

甘かった。雰囲気を超える程度の敵じゃなかった。

やっぱり、これは戦闘だ。

ううん、違う。

これはもう、アサトに私の名前を呼ばせるための——戦争だ。



アサトとの、ほんの一時間くらいの逢瀬おうせを終え、本当に帰路に就こうとする。

「これから冬になって陽が沈むのが早くなれば、アサトと逢える時間も短くなるのかな……」

「…」

「そうかもな」

私のいじらしい台詞せりふに対して、アサトの返事はそつけない。もつと気の利いた文句を返すべきだと思っ。

「じゃあな」

アサトは手をぞんざいに振って、あつさりと公園の出口に向かう。私の家の方角の出口とは正反対の方向なので、『途中まで一緒に帰ろう?』とも言えない。

「少しくらい別れを惜しんでくれてもいいのに……」

怨うらみがましくアサトの背中に念でも送ろうかと思っただけど、いつの間にかアサトの姿は消えていた。

「……………」

アサトだけじゃない。気付けば、公園からは人の気配が完全に消えていた。

背筋に悪寒が走った。

嫌な事を思い出しそうになる。

「……帰らなきゃ」

考えるな。余計な事は考えるな。早く家に帰るんだ。

けど、そう思い込もうとすればするほど、呼吸が苦しくなってくる。

「あ、れ……………」

立っていられなくなっ、地面にへたり込んでしまった。無理な運動をして酸欠になっ、た時の感覚に似てる。

「はあ……はあ……」

なに、これ?

「はあ……はあ……」

なんなの? からだ身体が熱い。

「はあ……はあ……」

心臓? 違っ、もつと奥が燃えてるみたいだ。

「はあ……はあ……!」

誰か……アサト、助けて!

「——ようやく見つけました」

鈴の音を鳴らしたような、凜とした声が聞こえた。

顔を上げると、和服とミニスカートを組み合わせたような衣装を着た、黒い髪を左の側

頭部で片結びにした女の子がいた。サファイヤ蒼玉のような大きな瞳で、私を見下ろしている。

今日の授業中に、居眠りをして見た夢に出てきた女の子だった。

「……………誰？」

胸が焼けるように熱くて、言葉が思うように出せない。

私の身体、どうなっちゃったんだろう？

『——ツバキ。この娘、（機獣少女）の適性があるようだぞ』

突然、私とも、目の前の女の子とも違う声が出た。女の人の声だけど、（スピーカー）拡声器を通したような、どこか機械っぽい声。

「まさか……。では、ここはゼヘナなんですか？」

ツバキというらしい女の子が、手にした（薙刀）のような武器に向けて言った。機械っぽい女の人の声は、あの武器がしゃべっているみたいだ。

『いや、違うな。まるで見た事のない星空だ』

「星空……」

ツバキが空を見上げた。いつの間にか、すっかり陽が落ちてしまっていたらしい。

「帰り、なきや……」

家に帰って、ご飯を食べて、お風呂に入って、明日は休みだから少しだけ夜更かしをして、また学校に行って、くらうに会って、アサトとも一緒に……。

「（あなた）貴女には、帰る場所があるんですね」

ツバキが無表情に私を見下ろして言った。その瞳が返事を待っているみたいに感じたから、私は（うなず）頷いた。

「そうですか。私も、私がいるべき場所に帰らなければいけません」

状況が呑み込めない。ツバキはどこか遠くから来たのかな？

「（カグツチ）の言葉で、ここはゼヘナなのではないかと期待しましたが、どうやら違うようです」

「（カグツチ）っていうのは、機械っぽい女の人の声でしゃべってた武器の事？」

「我々には圧倒的に情報が不足しています。そこで、貴女に情報提供をお願いしたいのですが」

それはいいけど、先に私を助けてくれないかな。胸の熱さが、もう、限界……。

『ふむ。ツバキよ、まずはこの娘をなんとかしてやれ。（MBコア）が私に反応しておるよ
うだ』

「……………承りました」

よく判らない会話が私を置いてけぼりで交わされている。

「これを握ってください。そして、ゆっくりと深呼吸をしてください」

ツバキが地面に膝立ちになり、私の上半身を起こしてくれた。そして、手に持っていた薙刀状の武器——〈カグツチ〉を握らせてくる。私は言われるがままに、それを握って深呼吸をした。すると、少しずつ胸の熱さが治まっていくのが判った。

「落ち着きましたか？」

私の顔色を見て察したのか、ツバキが問い掛けてくる。

「うん、もう大丈夫みたい。……何だったのかな？」

私が急な体調不良に疑問を抱くと、握ったままだった〈カグツチ〉が答えた。

『今の接触で確信した。其方そなたの体内には〈M B コア〉がある』

『其方』という古めかしい言葉遣いが一瞬、理解出来なかったが、これは『あなた』という意味で、つまり私の事だ。だけど、続く言葉は本当に理解出来なかった。

『えむびいこあ？』

「機獣少女」が持つ、特殊なエネルギー生成機関です」

今度はツバキが答えた。この子はずっと無表情で、淡々とした口調で話す。武器だけ人間臭い〈カグツチ〉と、人間だけ機械的なツバキ……それはそれでバランスが取れるのかな？

なんて現実逃避してみたけど、彼女達——〈カグツチ〉は性別は判らないけど——の言ってる事はまるで理解出来ない。

「あの、あなたたちの言ってる言葉の意味が、さっぱり理解出来ないんだけど……」

「そうですか。やはり、ここはゼヘナではないようですね」

私が困惑気味に言うと、ツバキはまた私の知らない単語を口にした。文脈から察するに、地名みただけで聞いた事がない。外国かな？

『ゼヘナ』って所から来たの？ 聞いた事ないけど……日本じゃないよね？ ヨーロッパとか？」

『『にほん』？ まさかとは思いますが……ここは惑星・地球なのですか？』

「え？ そうだけど……」

なんだろう？ ツバキの言い方だと、まるで地球じゃない星から来たみたいに聞こえるけど。

「やはり情報収集が必要です。改めて、情報の提供をお願い出来ますか？」

そう言うツバキは無表情だけど、口調はとても真摯しんじで、好感が持てた。

「うん。いいよ」

助けてもらった恩もあるし、私が知ってる事でいいなら話してあげよう。

「感謝します。私の名前はツバキ——ご覧の通りの〈機獣少女〉です」

「さっきから気になってたんだけど、『きじゅうしょうじょ』って何？ それに、この武器は？」

私が握ったままだった〈カグツチ〉に視線を落とす。

「機獣少女」というのは——」

『——ツバキ、奴だ！』

ツバキの言葉を遮るように〈カグツチ〉の音が割り込んだ。

そして、ツバキが私を庇うように背中を向けていた。いつの間にか、その手に〈カグツチ〉を握っている。

次の瞬間、すさまじい衝撃が走った。何か大きなものがぶつかったみたいだった。周りの地面がクレーター状になっていて、ツバキがバリアのようなものを張って守ってくれたんだと理解するのに、少しだけ時間がかかった。

一瞬だけ展開された青白い光の壁。

まるで防御魔法みたいな。

「……………くっ」

ツバキが苦しい息を吐いて、片膝を突いた。〈カグツチ〉を杖のようにして身体を支えて、視線を前に向ける。

何かが——いる。

形状の定まらない灰色の何か……私はそれを見た事がある。夢で見たツバキが戦っていた『スライム』だ。

ツバキがいて、『スライム』も実在した——あれは夢じゃなかった？

『ツバキ、戦えそうか？』

私が状況に混乱していると、〈カグツチ〉がツバキに訊ねた。

「……正直、厳しいですね。〈M B コア〉が上手く機能していないため、エネルギーが足りません。相撃ちに持ち込めれば御の字でしょう」

ツバキは、こんな時でも淡々と答えた。

相撃ち……それって、あれを倒すのと引きかえにツバキが死ぬって事？

『死』という非日常的な言葉に実感は湧かないけど、非日常的な恐怖なら、割と最近感じただけだ。あの時の事を思い出し、また呼吸が苦しくなる。

そんな私の方を向いて、ツバキが言った。

「残念ですが、情報の提供を受けるのは不可能なようです」

ツバキの青い瞳がじっと私を見つめる。そこに恐怖の色はない。

「これから奴の注意を引きます。その隙に逃げてください。走れますか？」

「え……でも、戦えないんでしょう？」

「はい、先ほど張った障壁で力が尽きました。ですが、貴女を逃がすくらいの時間稼ぎは可能です。だから——」

「やだよッ!？」

ツバキの言葉を最後まで聞かず、私は叫んでいた。

「やだよ、そんなの……。私を助けるために死に行くんでしょう？ そんな駄目だよ!」

「私は〈機獣少女〉ですから、戦って命を捨てる覚悟は出来ています」

ツバキの口調は変わらない。強がりではなく、本当にそうなんだと思う。

「だからって、死んでいい事にはならないでしょう!？ まだ、ツバキとちゃんと話してない! 私の名前も教えてない! そんなので死に別れたら、私は後悔するよ……そんなので生き延びても嬉しくないよ!」

まくし立てて息を荒くする私を、ツバキは無言で見つめてくる。

私の言ってる事はわがままだ。自分の気持ちを押し付けるだけで、状況を打開する手段なんて何も持っていない。だけど、誰かを犠牲にして助かるのは……もう嫌だ。

何かないの？ ツバキと一緒に助かる方法。

「……貴女は優しいんですね」

「え……?」

なぜだろう。無表情のはずなのに、ツバキの顔がすごく優しく見える。

「会ったばかりの私の命を気遣ってくれています」

「それは、あなただって……」

「私は〈機獣少女〉ですから。ですが、貴女は戦闘とは無縁の一般人のほうです」

また『きじゅうしようじよ』だ。あの『スライム』と戦うのが仕事なのかな？

判らない事だらけだけど、判った事がある。ツバキは機械的だけど、それは無感情なんじゃなくて、使命感が強いだけなんだと思う。そうじゃなかったら、こんなに優しい顔が出来るはずがない。

強い意志で自分を律する事が出来て、会ったばかりの私を助けるために自分を投げ出せる人——それは、まるでヒーローだ。

「〈機獣少女〉の私には戦う義務があり、一般人の貴女には生き延びる権利があります。だから、貴女が負い目に感じる必要はないんです」

「そんなので納得出来ないよ!」

ツバキは少しだけ困った顔をする。

どうしたらいい？ 何かいい方法はないの？ ツバキと一緒に助かる方法。

「——そうだ……」

私の頭に一つだけ案が生まれた。名案なんて呼べない、苦し紛れの無茶なものだけど。「ねえ、あなた……〈カグツチ〉さん？ さっき、私に『きじゅうしようじよ』の適性があるみたいなの、言ってたよね？」

胸の熱さで意識が朦朧もうろうとしていた時の、ツバキと〈カグツチ〉の会話を思い出す。確かに、そう言っていたはずだ。

『……言つたな。それがどうした？』

〈カグツチ〉の口調は疑問形だけど、明らかに私が言いたい事を理解してる。その上で訊いてくるという事は、私の口から聞きたいんだ——その覚悟が本物かどうか。

『『きじゅうしようじよ』っていうのになれば、あれと戦えるんでしょう？ 私が……戦う』

『よからう。ならば、私を手を取れ』

〈カグツチ〉はあつさりとして承してくれた。言い出した私が拍子抜けするくらいに。

「〈カグツチ〉、正気ですか？ 彼女は素人しろうとです。無茶です」

『誰しも最初は素人だ。其方そなたも初陣はひどい有様だったな』

意地悪く笑う〈カグツチ〉にツバキが気色けしきばむ。初めてツバキの表情が目に見えて変わった。やっぱり、私と年代代の女の子なんだ。

「そうですが、それとこれとは——」

『議論をしている時間はない。奴が動けるようになったようだよ』

〈カグツチ〉の言うように、『スライム』がゆっくりと動きを再開した。ツバキの張ったバリアの衝撃で、さっきまで動けなかったけど、回復したんだ。

『其方が死ねば、遠からずこの世界は滅びる。ここはゼヘナではない。奴を滅めする手段がないやもしれぬからな』

「……………」

『だから——この娘を見捨てて、其方が生き延びろ。そして、万全の体調で奴を滅せよ。この世界全体のためを思うのであればな』

「そんな意見に私が頷くとでも？」

『無論、思っではおらん。しかし、ならば判るな？ 其方が助かり、この娘も救える、たった一つの冴さえたやり方が何か』

「……………はな」

ツバキが私の方に向き直り、じっと見つめてくる。

「選択肢はないようです。無茶ですが、貴女に託すしかありません」

「無茶かもしれない……けど、無理じゃないんだよね？」

私は精一杯の笑みを浮かべてそう答えた。

私の言葉にツバキは一瞬、きよんとした顔をした。

虚勢だとばれているかもしれない。だけど、物語の主人公だったら、きつこう言うから。

ツバキはほんの少しだけ表情を緩めてくれた。気休めくらいにはなったかな？

「——解放」
リリース

ツバキが短く言葉を発すると、ミニスカートと和服の衣装が、ごく一般的な女の子のそれに変わっていた。具体的に何が起きたのかは判らないけど、変身を解除する言葉だったみたい。薙刀状だった〈カグツチ〉も、勾玉まがたまみたいな形の小さな黒い石になっていた。

「頼みます」

〈カグツチ〉を私に差し出すツバキの表情は、変身している時とまるで違って、不安に揺れていた。

「うん。頼まれた」

だから、少しでもツバキを安心させたくて、また虚勢を張った。

『娘よ、準備——否、覚悟はよいな？』
いな

「うん。やるしかないよね」

手のひらに乗せた〈カグツチ〉の問い掛けに答える。

怖いけど、どうなるのか判らないけど、ツバキと一緒に生き延びるためだから。

『ならば唱えよ。』
リストレイン 『拘束』——と』

「リ、拘束！」
リストレイン

〈カグツチ〉に言われた通りの言葉を復唱する。

胸の奥が熱い。けど、さつきみたいな息苦しさはない。心地良い熱さだ。

そこを起点にして、自分の中の何かを書き換わっていくのを感じる。

私が、私のまま、私じゃないものにならわっていく……。

「……………はあ——」

自分の中の何かが書き換わっていく感覚が終わった。長かったような一瞬だったような、不思議な時間だった。

ふと、自分の格好が変わっている事に気付いた。変身を解く前のツバキと同じ衣装だ。

これは予想がついていたけど、やっぱりコスプレみたいで恥ずかしい。

「ん…………？」

変わったのは衣装だけだと思っていた。けど違う。頭と腰の下辺りに違和感がある。手を触れてみると、ふさふさした感触がある。頭に付いているのは三角形の何か。腰の下に付

あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第一話をお届け致します。

今回は第一話という事もあり、少し長くなりました。本当は前話のプロログでここまですりたかったのですが、長くなるし、ああいう形の導入にしたい気持ちもあったので、結果的に前話は『第一話』ではなく『プロログ』となりました。

変身ヒーロー（もしくはヒロイン）が変身するパターンはいくつかありますが、今回は一番多いであろう『巻き込まれ型』です。お手軽ですし、王道という事で。

そして、今年の五月から立ち上げた『BLASTER form』の看板娘・ツバキも登場しております。性格が少し違いますが、理由は次回以降で。

他にも〈機獣少女〉とか〈MBコア〉とか、〈カグツチ〉なんて聞き覚えのある言葉も出てきました。これらの解説も次回以降でやりますので、自著『漆黒の狂襲姫』との関連性を疑いながらお楽しみいただけると幸いです。

早いですが、ここらで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。ここからが本当のスタートです。新シリーズ『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』をよろしくお願い致します。

長いので略称は『ゾイヤミ』でお願いします。

それでは、次は第二話でお会いしましょう。

2014 / 08 / 14 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る